へ 5
2958

へ 5
2958

敘

詩是歌也爲聯爲俳
爲辭諸相是詩也
爲詞爲曲爲夫
俳亦歌也俳耶俳

耶動天地感鬼神古
昔耶當今之時善
佛者吾唯知遯窩
隱君子也豈唯吾
志之富國稱之豈唯

富國稱之四方咸稱
之凡之於佛也不
必詭秘不隱淺陋
轉俗爲雅觸類而
散使讀者一唱三嘆

絶倒稱善矣實舊
門之第一義也須有
知樂舍主人者亦頗
好佛常從公遊因輯
以所作錄成冊子將
附剞劂余聞之
喜甚既而嘆曰嗟
乎未藩良家也其
先出北傑中氏弼横
井氏祿跡手石職

歷參政不為不貴也
少壯留意武事廢
伎不習並舉其妙
而詩書乃固也自聖
經與傳諸子百家

以至野史家言稗
官小說罔不旁羅搜
索單字其間奥也
是今之世不多覩焉
然數仞其牆人鮮

得觀是以唯知其
善佛而已甚則以
謂山人野客也此
其所以自樂而雲輩
所以深歎也今四方

讀此集者知公之能
者乎稱也且知公之
吳淑仕佛之所能者
也此余因以數一語
也公之詩名時殷今

改并明字伯脩號
邈富一號暮翁又
稱知雨亭主人又戲
號半帰菴或也有
雙或号隱子中年

因病致仕卜宅於
城南前津里居年
二近七十而顏色悅
澤隨所不衰今嗣
藤瀬田氏今又為

參政宮

明和丙戌冬至日

張州藩士 堀田

方舊撰

序

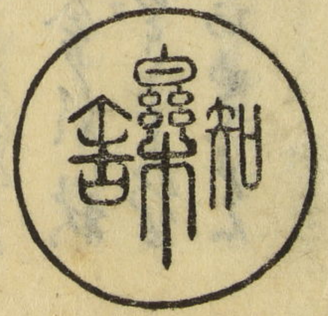
大元朝末年に時ありて韓愈の爰明
なりし。尾の義源君八治世の年にあたり
時なりしなり。ざ所八武り長し
文に富み。官に忠に孫足りて。勇に較諸
なる斬新なく。威に馳るなりつゝ。
余力に傲慢をそなへ。みゝその枝柱を
さゝし。吾ひしに拾ひあひて白く
梁の塵と動きに拾ひて白く
耳洗傾け万家筆成像く。霧ケ浦

年あり久敷。されど中にとく絶ぬほのぼのに写して。海内名所を遠ふの歌
千う年うりさへ人あこがれもありて。毫鑿よ
ゐ様と模翻せるとかやうしきを歌も海と
久し。幸に支那撫の三子。前く後者
三篇に一千首章と輯録して秘蔵
せるもけり。あり。隠者く候すれば。見合
せるく剞劂氏に付せんの平う微志成
ゆに。いさ労して豈なる年一とそ。始ハ
不満の色もおハせしう。頻ふたよりも

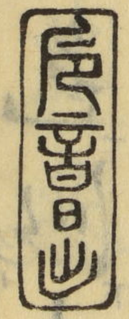
たまうり粤芸集と號しまし
ぬ和文のかし。丙戌冬会稽秋
九月梓よ備して世に著すこと。作者
稱号の章不足なるハ後の石史者
撰を侯のこ

知樂仝

達下



蘿葉集序



挺之弱冠得見邇窩老君爾後辱布衣歡者二十有餘年矣頃請其風度焉君吾

藩臣室也才居職為
政有賢者之稱齡過
半百致仕隱于城南
之墅忘前日貴勢毫
無矜持之色以下未嘗
有官者是其恭也清
齋不閒不施雕飾衣
食奉養唯取足耳不
好奢色傍無婢妾朝
夕給事者不過三五

人是乎儉也有柔執
謁者不問長幼心擇
貴賤一以溫顏接之
竟日不倦是其和也
唯談風月不臧否人
物是其慎也素好俳
諧林泉游賞之致花
鳥視聽之娛悉寓之
於此是其適也夫有
其一猶足稱矣況具

五者乎君之賢可知
向者有人揖吏之平
目所詠名曰蘆葉集
鏤梓以行于世而板
藏于家其人歿而板

亡逸書肆苦要應
罔才〻霜欲再刻
〻謀諸君〻侍史
文樵文樵授而授之
問序于余余謂君

ゝ匠心造語獨得
妙受傳而通之者
人ゝ知ゝ固無待
余言故叙其素以
以告遠方慕君之
風者如此
天明壬寅夏
岡田挺之撰

初編　半掃菴也有著

まんりハ卯のこゝろ　蕪蕎
ゑ　蕪の中　搗もゑ　蕪の根　芹　ゑ
七州　沢瀉　弘味噌　ハまこと　こゝき
七夕　つむ　ハ　芹に白し　名利
唐こも七曜字　こゝろ　ゑ　蕪清
北ハ　こゝ　ゑ　ハ　むこ　梅の花
小ハ　こゝ　ゑ　ハ　頃れて　梅　ゑ
洗村　こ　一　こゝ　咲　こゝ　梅　こゝ
脊戸　海　こゝ　ゑ　咲　こゝ　梅　こゝ
八重　の　ハ　ゑ　こ　梅　こゝ　梅の花

雪乃　春　ゑ　折れハ　ゑ　こ　咲　ゑ　花
下　話　の　泥　こゝ　こ　根　梅　ゑ　ん　め　れ　花
梅　こ　や　耳　こ　こ　猫　の　新　ゑ　こ
花　ゑ　て　花　ゑ　の　な　き　梅　乃　又　こ
咲　こ　け　や　梅　の　花　情　ハ　こ　ま　こ　あ　ゑ
咲　こ　け　や　梅　に　口　れ　て　ゑ　り　道
河　面　ゑ　こ　庭　や　れ　ま　こ　り　ま　の　雪
ゑ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
雪　こ　こ　ハ　雪　こ　こ　ま　こ　や　ま　る　ま　雨
傘　に　ゑ　り　下　話　こ　消　ゑ　り　ま　の　雪

まつこ去年の暦も柳てきさう郎
柳〳〵こう蚤のうふ形や蚤乃面
まつこ京の幕も紺屋て蚤の面
蚤れ毬蚤にてむこうこ蚤ふ
うくいこ式形れて守銘庶ふ
蚤の以中とこまこす初春う郎
英毛や二寸めあハ金以乃薮
英仲やまつこ井筒も脊のこれ
武者絵こいあ〳〵らひあこき柳る
横ふ〳〵てこれこれの柳う郎

こへまつこ延ぬこもれき柳う郎
折るこの札こいこれて柳る
こ釣うこうこ蚤これ式柳ふ
こいくこ毛これこもなき柳る
この枝も階こうこらねやこき式
屋根こうきこにここられる押ふ
積雪も月やかこ式房う道
因こ巣に物かのこも勝月
風絵も森こ川こりこ徳こ
障ここい松竹こ式いこや松日こ月

月花を消して天くれハおろかなる月
ゆゑ目ゆ金ぬ眼筋や鄙ゆ
三日月のえりくなるゆ脱れ
拾ゆを落葉乃筋や杉ゆ月
ゆ柿の山ゆ西成本を巌ゆ郭
鶏ゆか寄ゆ西部垣根ゆ
本代乃伊達やさくらの洗英ゆ
出ゆりや月蛾ゆ蛾ゆ針の沈
初年や柳ハゆりゆ小夏めゆ
初年や祢豆に作ゆ底屋屋

紅梅ゆ梅ゆ吉の名ゆ
古町や猫と泥梨乃 高山
ゆ嘴絵に
金色の菜ハ今ゆや祢ゆん像
元一ゆ雨ゆ八幡ゆ
吉海苔にさく乃奥乃さゆ
梅さく宮やゆ壁の内裡雛
俳ゆ女蓮や麻の毛ゆ
鄙ゆ女ゆ里ゆ田ゆ
川奥の海ゆ買ゆ

菜畑うつ
雛まつる山家や梅ノ花　傀儡師
蕨さくをとこ　帝　雛
よしの女の笠きぬうらや田螺とり
花寺や雛まつりして　梅の花
暖一雨ぬれて田うつ
春のくれものとく　梅や菜の保
梅のちくぶや湯殿よりもれ水
曲ゐに梅ノ花　流れ　椿ノ郎
春の野ノ蕨ノ蕨ノ蕨

永き日や幕にもたれ山やさくら　将
沖茶ノ花　梅ノ郎
冥府の庭よりうつる梅ノ郎
蝶くや盃人ぬつけくゆく
沈痛ノ梅ノ郎　梅ノ郎
こ花の笑ふ　傳ノ郎　破人ノ郎
山ゐや梅ノ郎　立ち　立ち
うゐみ森の梅や　梅ノ郎
笑ノ梅ノ郎　梅ノ郎
をうく田も　梅ノ郎

井の内や山吹さきてなつかしう
夢に京も百ハて　旅子の歌
一枝ゝ蔦さ妻ゝ尾や初ゝ旅の声
笠ぬれハ一雨ゝ雲ゝ花ゝ
雨ゝ雨ゝハむらゝなゝまゝ雲ゝ
むさゝゝ山ハとり巣ゝ　巨燈
苔代や雀もいさゝ蒲て舞る
為世へゝやゝゝ糸ゝ風中
多折てハ下にゝまゝ蒙の宮

ゆゝ素やゝゝまゝ蒙ゝ
春のゝうれ住ゝ

夏部

をとこみにうつる風見や　文政

いろむらの麦をとるや文政

今様をはく綿もありて詠もく

菊もく中綿に別まや　文政

夏ものゝ川や衣桁にかゝる風の色

夏の賣の出るや　杜宇

かゝ　地にちらめる時雨や　郭公

秋ふくも耳ハ蚊入すの時雨

蚤蝨ものゝ嘆あり　てほとゝぎす

言やうや待るものふるしかりきたる
かりまたは三日ばかりのあるひとりの青衣
遍照もしら女ありうくるかりきたる
法師のあるも声にうたる杜宇
まつ川恋に拾ふ枝唯を郭公
ほとゝぎすきれ仏師も耳と刻まるき
印の石やあて追ふ殺れ殺のゆく
山もうれ玉敲よ第ゝ葉ふ
灌仏や寺ゝ石見の社なつ
石のゝさ白ひゝいてきわし

南天や米こ刈ゝ玉敲乃ゝて
麦秋や風もは苦寺 向れ村と
麦秋と倩ゝ苗ゝ仕起ゝり
竹乃子や高さ苔に名も生た
竹もまさる子故ゝ末下やさ
ら風ハみふる葉に舞乃稔麦れ
松れ月に明てゆゝ有や末下やさ
石部ハ繰乃ゝ月ゝ和の石
姫ふ月ゝ響ゝ石田部
戸ゝうゝ棒ゝ凡 玉蘇ゝ

こうさ交ぜるのれさ交乃柳者
いさくいて師ハきけるれ懺る邦
原を拾ふにうくしる明りや毋の懺
徒しけるくうこうぬ法伐乃懺ふ
義の番伐久ハ八法元て菖蒲ゑ
八百やうも咨ぬうふくあや先ふ
粽ゆハ井や言原れ言ハ法くう
櫛の歯もいれぬ六ロ乃粽る邦
六ロうう松くうるやのりを風
木れ下や国とふくれ法用元

笹の葉にぬとくゆうう萩伐る邦
石化察乃言て根作の根やりふ
骨折とくあうく本根のありる邦
あり大や葉も言を撒せとも
考布絲へも火というう元屋
我やくくうるる根作のほるふ
ゆハ屋いれれ涼乃蕭むしろ
忠盛うくくてハれハりれる邦
屋とるる代や屋元を生ふうと
表うありて骨折只言寄屋うう

大将ハ屋敷ゝ知ぶやほゝる狩
屋よハとゝひうゑてや火とり虫
書物に白ひしもわゝと五月やと
葬加賀時雨知寺やかんこ多
待人もとゝうにて水鶏
うゑき乃沖制の外不坂きり江
人ゝ門をけと近れとゐれうゐ
村中にひとりと寺あり樓桐の雲
初なりの瓜や畠の新茄ゝ
鄙賣も人にたゝゐ糸う邦

苔筋乃白に移ると糸う笛
涼ゝさを吟ゝつゝ悔ゝ行
ゝ中に蒐ゝ古ゝこゝ仆
多森世乃行ふ茅ゝうゝ仆
鮒戸や寄と鉢口とうゝ表
芭蕉よハ孤うゝ去ゑれ渋園
地ゝぬ指ゝくきゝやかゝけゝ
沈の名を蓮と吟ゝ沈ゝ
苑石よ苑ゝ中ゝてかゝうゝ
鬼石合に借ゝとくき角と軽牛

菖蒲ふく芝居のきあや幡半
立てしの杜丹と咲く百日紅
咲あまれる桜の一枝や正日和
初鰹の耳ほく者れる暑うれ
世の夏の夜豆ハ冷うの氷室哉
涼く人形下地てハ外雪の岩
に外く乃至ものいてあり川ハ市
井戸初りの涼世く出る暑ハ
箱入を葉もあき竹に暑ハ
子福者といふれく飯やれ暑ハ

唐粗れ中ハく笠れあり川さ涼
不破乃関盆ハ日乃ふる暑ハ
桜ハ出く常にふる涼ハ
ふふふに庵ハ口もれく涼ハ
薫ふりうまて風よ千涼ハ
むふく祖父ハ川へと涼ハ
涼ふもれ焼まく川むく
何故ハ茶鞄捻れく法ふハ
毛干れ雛に桜れ之ふハ
年玉と六月講ふあふさ涼

我しらぬ蛙や昂ふ蟬のこゑ
松のまくつるる梢やせみの声
葛の葉を蓮もさらぬようす哉
小雨や揚屋大工ひさすは新
屋うらはやとらの家も月に金
初紅葉やうり橋砂子 砂河原
夕白やゆり焼よりの紅葉
ゆふ紅や大工にひたる水場
夕うりや月の清もきてにく
川狩や手うち借さるゑとを

葛ゝ汲水ゆり寄や 伐川

秋部

庶子にて大工朱に久り今秋の秋
門書の壷に掃しる秋一葉ゝ那
三日月乃射く蒼しる一紫苑
ゑ系とゝの〻庭もゝさハ一葉ゝれ
七夕や九よハかさぬ月の月
星ワ〻ゝゝゝみちや庶子をゝさ踏
ゝ半に小車さゝぬほ一逆
馬ゝゝゝれと半や木犀の星迄
干ゝのとゝもれて星乃ゝ向ゝ

暮むししも父ふふ給や蓮ふり
飯れたるぬ客ありれ之蓮まつり
屋夏れあしや蓮花乃瓜の皮
れくり犬乃袋を北世れ飯やり
夏虫の秋へとりつく花蓮哉
桐弥やゆふ報れ夏八年ふれし
き第を乃くふれ濯ク非
也れ秋浅蛙しして味をおとり
桐乃葉の瓜とれく蓮る蒲ふ
皇れ月乃くく花とあ紙茄子れ

雄風乃行の去まれをれとり哉
於加紙周や一夜飯屋の外
ロくしや本に呼むし父き暑
蟬乃ふ点掃て去師ふや初ふし
たくをたや蛙乃寺屋を清紙的
俣鐵や秋たくまる村を元て番
屋ゆれ掃ふくをし寺乃庭
鉢ク初や立ふ夏しと鉢坊を
朝ク初や堂のしきしは蔵入す
消報やすさ辻書れ村乃ふり

おさうはのこうりゆふへやロッの・このよ
ぼ大れをおやぬ乃　りうぶ　ぶ
ゆ夕ゆや秋を　すかへて　萩の風
ゆしハ花ゆや　萩乃うハ風を腐うう
廢なりけと　庭ぶ高ぶ　ぶ　晒臺
引　神ぶと　尾ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
不拂　除の　花と　咲ゆう　秋の庭
咄の　間れ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
咲ぶ　ぶ　ハ　新　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
夏を　ぶ　ぶと　造れハ　菴ぶ　ぶ　ぶ

用ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ハ　ぶ　ぶ　ぶ　野　ぶ　ぶ
稲　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
稲　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
いな　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶれ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶに　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
玉　ぶ　ハ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
賜　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

豊之野行もやまさ海せらく鵜かれ
案山子して侍里もありつ乃手
ひとり泉に二夜つゝかな砧かな
糊捨しいとゞ今宵はきはまるか
あさり満くす秋や未織り風の音
狩人よこそ角をあれ鹿の声
芋の葉や蓮りくゝえかゝつり振る
彼岸とらく忍ちやお寺の木綿畑
まのふたと人の登る月夜哉
朝かせにとらかれ影や小望月

あふむかぬ柳ハちりて名ふれ月
海乃暮山ほゆあるに名ふの月
人麿もいまや詠ゝ名り事ふの月
井戸くゝぎん和歌の川汲名乃月
芙蓉近江起てやしほ名ふれる
撞撞や気夜におし出ま事ふの月
芋むしに守る者もあるハなふれ月
大名の枕槌多子さ月見かな
雨乞をしさ説もせぬ月見かな
名月や目に捨らくあるな小の山

あハさるて癸とる猫も名ハ小川
竿ゝ名ハさるけみろ十六夜
朝ゝと迫ゝ寒く 稲葉小
豆ゝの袴ゝ出ゝけ衣ゝ小
冨士ゝ穂ゝ稀に着ゝ 綿ゝ
紛着く ゝ秋乃野 寺小
竹ゝ刈ゝ刈ゝ第ゝ田川ゝ
去ゝ秋ハ暮ゝて着ゝ田ゝ小
菊川の黄菊ハさゝむき望菊ゝ那
二度の月ゝ去ゝ紅葉や ゝの菊

色ゝ咲ゝ月に見せゝ けゝの菊
かさすゝ秋ハ暮ゝて ゝ菊
辻番も一ゝゝ菊ハ ゝ那
南ゝ色義や ゝ菊つゝ
菊ハゝや 絲着ゝ 花ハゝ
菊の月や 番ハ月ハ色に 海ハ近
ゝゝ軒ゝ 月雨ゝ 梅の月
菊畑ゝの ゝ星ゝ 居ハ月
不破の ハ芭蕉ゝ 梅の月
稽ハ ゝ栗にハ ゝ 梅の月

草うりやうれしきこゝろ紅葉日呂於
上とゝあるに月も繁あり　菌うり
蓑毛の父ゝ吟をうゝし　武
和れ芝月も為紅とて　葉山茶
殆うらやましい八ゝを於於ろ
賣家れ玉八下り名刑　芳つゝ
雪ゝこんて小春もちゝ　緑ゝけ
干神八ゝるゝ丹　きや松れ芳
於ゝ　殆や屋も於八ゝ　糸ゝ武
刑　於やゝふゝを相に　相一葉

刑　源れ時而於ゝ　れゝ　ゝきゝり

冬部

十月にのこれる雪や　後ろけ
ちくるやうなる　わが法
師の菓子　袋屋の影や　冬の月
孫忘れて月夜　忘れハ時雨　冬部
人ぞうつり　人待やうつり　むら時雨
ようけく寒さかるにはの照ふれ　冬
部　冬ふれ　ゆうやうて　冬の月
妙うぬはち　袋屋の影　ふられ　冬
部　冬ふく　袋　冬部　わが　ふられ　冬部

うしうんやへ後乃姫り世世時雨うか
なりうしやはへうしく　後乃声
時雨とはの拾てけるあるとうれ
拾て又袁今とさ世　其れ葉う那
一年の夜うし　所にはにうしく袁柴う那
うえ下のさう　はにうしく袁柴う那
光備れ　伝年　公事うしく袁柴う那
さひし　さと緑も遠久ぬらを赤
其ふうしのう　墳ぬは　袁葉う那
古野　うは袁もはうし　年うか

北社の東うし　茂久う　堅のうこ
志賀寺れ　屋や　光本うう　うこと
緑　と　今　なうう　袁葉　年　うれ
多拾　ぬく　袁　袁　袁や　ゆう袁
拾うれ　ぬに　うし　ハゆし　ゆう
ゆうう　はの　袁や　拾　れ　袁　本　之
拾　うはうう　袁　袁　袁　ぬ　袁　小　春う　袁
袁　ぬん　ハ　ゆと　ゆう　て　小　袁　う　那
金　と　袁　く　ぬん　ハ　う　ゆう　ゆう　小　春う　那
そ　そ　さに　拾　う　の　小　春う　那
ゆ　ゆ　さ　小　袁　う

泥わに佛の小袋や　小六月

信濃に家の多き故十夜の郎

袋もゆめ佛ゆかしく十夜哉

名残惜しかりし菊の十夜かな

菜も苔も留れ蕪や実くれわと

去年今年仏会つくさ奥不尽

今ハ世を蕪うて蕪に蕪哉

ふり捨て法を捨てハ月夜帰る

云ふ法喚けハ坊主の仇中なる

紅色ふ蕪ハ蕪ふ仇中なる

春雨を袖うち覆くて仇中なる

神れるもなほくまひりや夷講

ものゝ名乃音ハ去れて枇杷れ

夏痩の肥ふさされさ寒ふ新

隙ふものハ去れ出し星に立ふ郎

乗風呂のあつて入まあ立ふ郎

引越さ紙治やれ法の立ふ郎

うなつて蕪山ふハ引千大根畑

紙屋の留ちと去ちや大根引

蕪ハ神にあつて引新大根ふ

菜を法ゝ川口うれ引大根ゝ
炭賣れ薪や紙を法もせく
炭ゝりや法ゝ白れ豆腐賣
ゝゝ賣に出ゝゝえて猫のゝれゝ
あゝ法と法にゝゝゝゝ子ゝゝ
茨ゝのもれれ菜乃ねハゝゝゝ
帆ゝゝらも度ゆゝゝれ秋もゝゝ
法花屋へ蓋して茅れや河豚汁
蛇もゝや不昔ゝゝゝり根源汁
女房に一枚蛇ゝれ世 根源汁

四五すれ鯖ハ法れ 枯野ゝ郎
あふゝゝも書に書絵のれ堅ゝ
ゝいゝの茅ゝ人ゝり枯のれ
法茅ゝ盧せゝゆゝも枯れゝ
法ゝりの茅ゝゝれ堅ゝ
角ハなけと 狐ハ枯野れ
茅なゝて法供のを折 ゝ柱ふ
ゆゝゝれて金ゝすあれゝ
ゝれ寄も鉢茅ゝのはりゝ
初寄や去れの寄れ 古ふれ

初雪やなまめかしかる井も寒し
しら川雪や酒とまり名れ水宮ち
ゆくれていやらやこかす雪の宮
寒さ竹ゝ折れさうれ雪れ雀ゆ
凍ゝ鶏ゝ鶏ゝ鶏ゝや雪乃竹
待つきのれしてゆゝや雪の井
ゆ仏やよけのみゝハ逆やれす
雪れ格雪うゝ雪へうけふ久梨
うゝむゝハ火ふさん雪ゝ秋の雪
埋火や国ゝうゝ結の水宮ゝり

雪西も酒やへせられ宮ゝれ
緑つくりや七浦にうゝり宮
抱籠のうゝゝにさめれ湯婆ゆ
月乃秋も門ゝ叩ゝ井ゝき
瓢薬に双中ハ看せん井ゝき
明やゝき多結も仏ゝ井敲
きゝゝ鶏ゝ参るにうゝゝ茶ゝい
鳥ゝれ門仮ハゝゝくゝり哈
笑ゝゝ箸ハゝりゝ茶ゝい
なれ世ゝり先ゝ春ちゝゝ会仏

鬼門ゝ夜者せてや念仏
掛乞の地獄ゝ中ゝや寒念仏
牛の背にあゝまきゝやや年の市
爽に注傾城もありとゝの哥
塙掃のりや髪ゆつく清ゝく
湯の辞後の雪に成ゝり年住也
鬼ゝ人ゝそゝれ年の浪
米つけゝ深ゆく弱もゝゝ市
ゝゝゝは鶯もあゆまた年の坂
六の達十ゝつそゝゝの雪

梅はかさゝゝや門乃角大師

[illegible]漢詩

[illegible]年乃元日に

[illegible]暦[illegible]の[illegible] 初[illegible]

[illegible]

[illegible]

元日

[illegible]を[illegible]月の[illegible]

江戸にて幸菊に
旅人とまりあさ市　解れ書

幸菊
市にて市の中にて行きかれ
人の多きを源山まうしてと
立ちのよりれ心あり出あり
はるかに市や空也乃　友来立

志賀寺に於て池魚の網漁を
打の影やうつりきれ　友れ兎

武州京仙寺にありて子をうしなひ
古墳をとゝ紅
みしう夜や死て弥紅月と星
同　浦辺寺あて
耳と世に弥さてさびしく河くまて
江戸にて初友
菊のしくくをや旅のうもこ
源太郎水を訪ひて
をうして元源世八月元紅友来立
味茶一同元八月九日に

やうしされくふハ壁面の　九日の郵
籠とりくふ題をとりて
鄙なりて　忠のいとちうれ
拙里よ鄙を年ありて
鉢象や誰れかくれ　下話のあと
きりぶ　初雪と鄙をとりて
やよ蒼にとくくたちうう　山の雪
玉枳の京求めうとやて　乞おくれ
屋根いうう　板蒼なうハ　うれ時雨
蓮二子七四忘二月七日うう

仕七日うう蒼うう　巴のなりうき
巴鄙孫別の餞別又
役せを作りて　ある物の留ちれ　拙
彩宅へ招うう
をうれ　春や　方壁の　きを
三月うう　ある　物を遠に
うやよ　百里や　京乃旅　方彩
うを　秋　海　うう
わう　叫や　うう　解　松　ん
六月十七日　深川　素の亭　うて

[illegible]軒端[illegible]みか
桜井氏老母の年賀に
つんつん千代[illegible]や作れ[illegible]
人の七十賀に
王母[illegible]役や[illegible]のうえをそれ
先二江戸へ行役に[illegible]
[illegible]を[illegible]別[illegible]　百日石
麦阿利　髪を[illegible]
[illegible]ひら梯れ捨心
三月[illegible]東[illegible]面別

万てとりふ男や沙干の[illegible]みやけ
桜井　雨の日
[illegible]雛乃[illegible]や[illegible]に　桃の[illegible]
五条坊と使して江戸へ下り[illegible]
途井　[illegible]坊[illegible]
西井に[illegible]
江戸[illegible]初夏
若[illegible]又日　[illegible]や　藤[illegible]
成瀬氏[illegible]十賀に
[illegible]の[illegible]に[illegible]麦の秋

[illegible]時芳花の人々[illegible]
麦の穂の睫もぬれわたるれう雨
名月の雨
傘にてもり人々[illegible]月見哉
[illegible]尾州[illegible]
けふに一秋宝金[illegible]
萩[illegible]蘇[illegible]
月の初成列[illegible]芳花の
人々[illegible]
脱[illegible]列[illegible]の人[illegible]

菓兎眞州[illegible]列の俳列
[illegible]川[illegible]
[illegible]
[illegible]の人[illegible]
[illegible]七四[illegible]に
[illegible]波[illegible]
千[illegible]四[illegible]
[illegible]菜[illegible]月[illegible]老[illegible]
[illegible]月[illegible]
[illegible]

鶴城一周忌に

くふうとて月にとつく汗ぬぐふ

或人の句をかへて

ほとゝぎす百も九拾七を拂ふ　古麿

押原郭主門人へ招る

酒しとはいふて役ゝ出家ふり

雨月妻子ふれ名紙脇ふ

うゝめしき茅や狐ふ　弱ふ　菓

知恵郭拂本の知恵へ主網の白求られく

宗祇居士仏ふ

ありて拂ふ郭

宗祇居士仏ふ

師走百許といふ

橘雪ふつを考てや小松ふり

高市に来とふして

かくて又爰ふ川　ふの宮ふ川

七月中旬有研究へ下り名蔵ふ

ふれふとふ拂ふ涉ふれ大井川

仲秋の雨ふ

雨の月ふ宗祇脇となく加ふ

菜雨歩に松ふれ名脇ふ

さてそれ彼方へまゐる道中の事
田舎より在らく之場を
信濃路に深き山道
踏南てめく獣と蒙りはべ
下駄別
丈夫男子は志ハりこと里郷ハ不
ゝて詩に除生の法し旅行
別莫と傷まんやとおもわり
蓮路矣解ゝ事路法を途中

契拙の
座敷の絵ゝ
座敷ゝ用も弱ゝ
弱腰に女の強ゝ
ゝ人ゝつゝれゝく廣き故腰ゝ
ゝ移絵に
故座ゝれゝ件の名ゝて姿ゝ郎
孤蓼ゝゝ女のおゝる狂画ゝ
山雀ゝゝ孫ゝくの別莫ゝ姫ゝゝ
冥土月ん面に

富士に雪ふりや笠八文かくに

虚無僧の画に

こも僧や萩すゝきにも吹く尺八

雲中春秋の絵ま

画名し時雨のすゝと雪みう竹

福禄寿あり

目出たさは銭一文字なけより福寿草

柳下治節の絵ゑ

世の中は鬼も十八多撰出し極かな

席上自画の狂歌に

此春のすがたをぬくへと柳かな

傀儡の絵に

潯陽の江や芦の穂の酒をかし

八文字柳下に美人流れ合羽着て

立ちる画に

笠いつれ柳と合羽の八文字まるく

摩訶目切の画に

急ぎにかけ乃鬼ハやゝ色かし石さしき

二日本堤の梅さき哉なら紀画に

霧のれの所や別まみおとしかな竹

大豆の画 春の うた

一さ倍二さ又ゆ戸を 春の うた

和歌にれを吉さる弱田山の画

深夜れに更ふやを ふく 弱田蛙

大豆の大根を抱 高ふ後

秋 蕎麦といさやゆ市ゑ 土大根

秋の野に月れ後と

ふるくの月れ着拾ゑ野の稲

本免の画

みくつくやうきゑ有りを 山の奥

水わりひに

賀茂川のきくやなられて 秀菱

道成寺後入の後

ゆとをるく 蜂よハ角もれ きものを

川りより布袋に

袴に仙めを 小鮎の多れ多

柳の画

白りへを多りめかりの柳 孔雀

琵琶と萩を吉れ後と

帝よりも琵琶にられとく 廉 四茅

若松ゝ　三番叟の絵

梅咲て松とやゝ　法の太夫　とも

猿後の月しる絵と行こそ扇の

鶯おとんやゝおとおとり

月にのくて公ゝ　猿の能

月おりゝ雪れ雪に舞る絵と

雪れおやなりせ友とハて　捨小舟

枯木に鶯と鶯のとゝまる絵と

見ふてもたゝふてゝ　ふてゝ　ふてゝ　ふてゝ

見昭女の画に

うゝ見ても宿あるよ　鬱つゝと

鬼の衣　鬼の衣　鬼の衣　鬼の衣　鬼の衣

柳の門や　牽加も　亜通り

鬼ゆりもんなゝく　芥子の坊主

鬼ゆりもんなゝく　鶯の絵と

子の日　鶯ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

狸の佛ゝ化ゝ絵画と

蛇やり火に佛なゝん　吉松

王昭君の画ゝ

偽らぬ日本の美や　子人竹
貫之蟻通の歌
雨のうしろ　や　蛍見るけうら
極楽と貝殻もて極の美
猿蓑の歌
うゑ紙猿　古の　山もうき時
女の三葉葵の画に
もむ　歌音　みれ　り　女郎
幕　歌　梅の画

ゆりゑさけを北口も美志比須
鬼の衣をきて画り
寒会仏を写うつして　仕丘ゑり
徒姫の画に
下戸と鬼をうりおせる所　大江山
狩きてきて
瓢藁に鮫も　おさへて　狩きて
約の義を絵り
長生殿の義や　鮫も　つりなる
書瓢に

狩きてきたりても　乗なる　書始へ
蟬丸琵琶を弾絵に
ひん松をなる　機の一紫れ

二編

去る頃

野寺西ゝ解脱と法代の去
なもとの雪ハ絶して続麻
蓬莱に尺蠖や落世の愁せらく
陶孔子の帰と郷や年一の紀
以中ゝ[illegible]の紀
恵方桃嵐[illegible]
ゝも芳菜雪の刻ゆく 弱下話
搖漾ゝ[illegible]ゝや四ゝ菜もひしゝ

[illegible]の猶指[illegible]
[illegible]の[illegible]に[illegible]
松[illegible]門や本陣の人通り
[illegible]村[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]

双歩千す枝[illegible]咲や　梅の香
芳[illegible]
梅[illegible]人の[illegible]
水枝の梅[illegible]　春[illegible]雨
八[illegible]の梅[illegible]の雪
[illegible]梅やいろ[illegible]痩[illegible]
涼[illegible]
[illegible]千[illegible]の涼[illegible]
[illegible]
[illegible]上に啼

うゑたもの例しよハ生れありて外
うゑたもを吹ふあいをと青色ハ
芽茅や吹くもうまんるゑ麦ハ菌
わゝ竹やうゑふをひくうゑて吹てゑ
清ゑ脱ゑ雨 麦の雨
しあしそ麦にうゑや麦の雨
零の糸ハよハ外て 栫ゑ
加減して去へしつゑぬ栫ゑ
しふ吹てゑてゑ青ハもゑぬ栫ゑ
枝ハいと糸ハ枝ゑふやなれゑ

屋原に栫ふてゑ山茶茶ハ屋てゑ麦と栫ゑ
山茶ハ雨へゑ麦ちゑ 麦ゑ雜
花ハ月やうゑうゑ源て八重咲
沈ゑて種ハ波や打ゆゑ月
麦ハ麦の月に飯屋つゑて紙月
洗濯にうハ麦や元てゑ行ゑ月
雙日の麦ゑうへゑ麦紙月
菜ハ茶や揚ゆゑ 麦の行麦
茶ゑうれて麦てゑ麦ぬ蔵ゑ

歌の名は猶へハ立を立田山なるを
揚句ハ立を踏ハ湯ハ山田寺うの
売捨しり南うや業の一の田螺元
業の名や君うるとて折もせに
雪は田もなを仮うは浮く田螺ハ
沈と田うり埋こもるの蛙う郎
涼志川世界を注うに蛙うの
雪うり南山界とちに住む蕪の
浜絶は法しし仮免なり雑子の声
涼茅や鶏うりかり子雑子の声

市代や人涼志川世界 二月 日
出うりや名を界とちに人うの
もうりや汲む井もうの水を注
市代や業つを水汲世乳母一人
うり年に初蕾は寒は形
涅槃会やさうを一を生別を
山寺は寺や佛うを多紀会
只我りして計し蛙や七業
お細工乃不形と雛乃工坐計
横うに見歌法師ハ形多雛

給の茶屋も吐月峰き　淑子うれ
ゐと呼へとロ和ふ　梅はる
ら江にきく淑子や淑田乃切元
法華もとめ寺雛乃大ふ
三月ゑ蒜も茶はれ節供ふ
帆ふ〻らにあふ風ふく淑子ふ
ひれのりや蒜ふ部選し　あり
嶋ハ笑ふ部や　結あり
あけくゝハ法華すゝ　あり結合
茶はれ戸も解に梅ゐを茶白部

茶ふ〻ふ茶吹ふけとて　れ巾
御所へ蒜ふ〻ふれ又ふり　れ巾
祖父れ月に考と蒜ふり　風巾
ふるハ埃ふ〻ふ　梅ふ
あのゑ子茶と碎人や山ふ
ゑ茶ふハ縄ふり　ふふ
打ふ結ふみやけの宇や山梅
一寸にふまれ人やおふ梅
結結ふ寸に　盞やおふ梅
酒ハふれふ鶯り　さ人あり逆梅

くさ〳〵て尺先つゝ雲霞か
胥折て蔦紅葉 尺余雲霞か
こゝ川峰く紅葉川ハんめんにうつる か
尺余なる山なれども高きこと千尋
山吟やとくとくと乃比丘尼寺
実れしに枝曲られる梨子哉
折れ人り秋の物ゝ梨子乃哉
あすゝれ桑乃延て蔦乃哉
香久山に赤ひるの干すつゝ哉
躑躅ちく谷やさくれもの所

折〳〵喜や一すじ先冬木下やき
月青や送れ門ゝハ松ゝ影

麦粉

若竹をもて足すにこゝ巻ゆる
すゝ掃の芳情をれの綿や紙こく
玉已に寸紙をものこゝ紙 浴う郭
麦紙のすゝ川口を枇杷の一葉うれ
耳ゝをゝすゝ川 蘇方りや郭公
松花耳指にわりてほゝ麦を
花の幕 紙屋にうりを 杜宰

高士より馬にみてありがたきに
ほとゝぎす有も命より蜀魂
いつも初音ましてた川音の時ゞ
郭公一声遠より　檐郭広し
続る時より桶屋休てあとしきは
ほとゝぎす人わよくしみとききは
蕎付くほとゝぎすや二度目の郭公
水遠きに小屋もうけさる蜀魂
みしか夜や登りしきは明の子
卯の花や卯月と書の名にそれ

短夜や明より　荒れ時のこより
涼しさは氷ぬと吸ふや花の堂
紅さく生れきの声を木下やみ
くし堅まる振りすく人月やまあらし
衣門へ虎の近よれば　田植かな
刈るこしきに荒む猿もありて苗元
小袋ハら浜乃田へ下して早苗しわ
箏より緒連ぬれば　孫笠の揃ふかな
菊や泣人より　繩りけられ
雲住の小塚と裏ふ絞きりか

こゝやそこも消まぎもありて 殺さりぬ
捨さるも喰せられしよしくうやりぬ
殺ハこ従へしうる 鄰れかやうぬ
わか宿れ殺やかまく 扇ぬ大工られ
多く門も傘にくくらふ殺やりぬ
迷書の飛舟飛しりにかやすらふぬ
将ひ殺とけし 螢れほしらふぬ
橋れ下ちこれらし通ふ 螢の郁
御川とも荒ハ千両れれ螢かね
えくしも口しゆくあらして 螢か郁

絵うしし 盃紙 書ふし 螢うか
盃見てハさうれひ水に螢かね
待人をまちくうし 江れ水鶏かな
螢れ涯居家涼し 竹
藻の花や是も根ハなき 池の水
蓮れ花や鵜にかゝられらし帯しき
ふひうし判をしめ名か 菰子の花
まそうひれ扇も菰子に嵐ふ
判さのハ仏へ上寸なし 乃花
笆をハ道れもやして 菰子坊

清らかれ絶かりて交野の狩人
門て賣りしと春ゝ六月 初茄子
とゝ〳〵に壁を分ち〳〵初茄子
元和元のつれ〳〵なれ仕ふり 初茄子
夕ぐれ軟 軟りこゝ 牡丹うれ
絢とやむ人〳〵紙はやや百合の毛
茅刈 ゝ お多ゝ四ゝ金沢公
細になくかんうや志賀の郭公
ゝゝ〳〵 旅うわゝやゝ味敷
傾城の ゝゝ 本 外 かゝ

〳〵毎に粽ハ答ゆ 志賀ゝ
粽ゝゝハ出〳〵もわゝ粽ゝれ
風狂れ茅に四ゝ粽ゝれ
ゝふハ文ゝ ゝや菁ゝゝ
ゝ ゝ 粟ハ 佐ゝ
ゝゝ ゝ 苞といゝれ粽ゝ
歌法師を寺ゝ建 懸ゝ邦
懸ゝ 仆れゝ ゝや 角粽
ゝを捨ぬ世ゝ 穀ゝの四ゝ部
山ハ雪 町ゝ八ゝ ゝの四ゝ
水仙 ゝ ゝ 菁 笹

えひすけて一枝ハ立うりく子
きり れうり人半いぶりく子
さみ〳〵れや入口りうれ子屋ゟ
五月雨や茶屋に塩ゟ 搖小子
男より女いろうり 竹月堂
夏艸や えれ一度刈ハ出ゟ声
傘うり さくみ こゝ探 堀半
蒸〳〵して 警ハ湯ゟ出る田ゟ
箒木や ゝ 脇ゟ 菓に 屋〳〵 脇
夏影や 奥 壹 紅 心いそうき

夕影や 雀 月の人ゟ 去 ゟ心ゟ
ゆふ白や 桃 灯 つ紅 茶師 堂
竹 ゟ ゟ 人 雪に 屋紅 乗 脇ゟ
木ゟ ゟ ゟ ハ 神 ゟ ゟ 屋ゟ
ゟの 書〳〵 屋に 乗ゟ 如 国ゟ 郭
夏 屋 ゟ ゟ に 移〳〵 屋ゟ 国ゟ
雪 屋 ゟ 去 屋ゟ ゟ ハ ゟ 紅
此 移ゟ 柳 ゟ 紅 ゟ ゟ
去 用 ゟ 神 ゟ 移紅 壹 錫
湯 ゟ ゟ 叫ゟ ゟ 紅 ゟ ゟ

抱籠や夢に聞むも竹の陰
冥々たる秋つゝ雨の心太
十八九も用意して小角豆汁
拍子に市にうの花あり川さぶ
ゆゝしく見れば脊中に背負ふ家
肥えたる人〳〵立さまれあり川さぶ
大名は豊と無れ暑さを
傾城の行の身とうれ暑さぶ
半も第も外き州川のあり川さぶ
涼しさ祈り立てやはやけり

雪踏入て易く新宅一家士治
屋や吐出すこれいて宮ゆゝ
水宮ゆゝ之十とかはくて江戸

姫紅

紅葉かな嫌(ハナヒ)ゆ嫌(ハナヒ)ゆ　くやり風
立紅の肩に姫むや　さ〻〻賣
姫まぬと笑ふや　夏鹿の青
照し井し　夏と呼ぶ　人〻の紅
折紅指す　手ふ〻〻　紅ろ　百日紅
秋立彩や　盃　藤　桐　松より
葉にまと　花ハぬ　夏や　色　姫　燈
紅なれや　水　写〻　の色

徒ふしてかせうん寄りて一紫う郭
籠入り蓮茂う繁く一葉う郭
たちいもかさと撰て刈とる
牛毒て意外川うりや天の川
うしやや今青天の河原の葉撰茶
七夕や苔ふく風を衣嘯うう
星の舟漕八日のとき和の形
静や踏れう舟の伊の紅
ふうり時意外川ゆ乙の川
月う寄に左吳はうくて嫁入星

星の床ゆ仕迫ゆや　嘯の意
縄桃や不吹も頃う金車
送星ゆやワうれう人に別れあり
大星を舞しき桃やゆ後参り
桃弦にゆ花て減寄や　桃声
傾発れうの虫の春うる打花ふ
人れ子八下多に寄ゆ躍れ
畑れ棒てふく花おうれ
ゆふうやや歳うる春秋うさく
曲て庵花桃も癒く　光乃秋

見えて拾ひ[illegible]あつまるかな
傘干せと胡[illegible]をむ垣根哉
蕣や世にさく絣の涉英[illegible]
[illegible]もらんを咲[illegible]の咲れ徒
蕣やハをもも咲うと云一[illegible]
わさうゐや国[illegible]を掘て育[illegible]
[illegible]の垣や活[illegible]のかし忘れ
源氏を[illegible]ひ知れぬ西風[illegible]
猫つぶや[illegible]絵はれうろ引てゑ
小車やさもとに半れ咎[illegible]

[illegible]の当たるや　蕣の花
鬼灯を妻にとらてや唐うり
厂もたらぬ玉章をとらてかけた風
松ふぬく厂や竪田を　虫通り
又うあまれ云絵もあり厂のこ
鄭乃や造り[illegible]ハ[illegible]
[illegible]てかんう[illegible]をあり絵次を
絵[illegible]牛れ刀の[illegible]の郭
を　[illegible]ひ[illegible]
[illegible]て[illegible]れて　門徒寺

[illegible]　芭蕉うれ
[illegible]と云り[illegible]　蕎の門
[illegible]の[illegible]　蕎の花さう
いしの[illegible]人の[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]
女[illegible]　[illegible]
[illegible]人拾ひ駕　[illegible]
[illegible]ハ[illegible]に[illegible]　[illegible]
[illegible]の葉も[illegible]　[illegible]
[illegible]ハ[illegible]に[illegible]　[illegible]

[illegible]
名月や[illegible]　[illegible]
[illegible]や[illegible]　[illegible]
[illegible]や芋ハ[illegible]　[illegible]
名月や[illegible]　[illegible]の[illegible]
[illegible]
十六夜や[illegible]　[illegible]
いさましの芋や[illegible]　[illegible]
世ハ　[illegible]の初[illegible]　[illegible]
小[illegible]　[illegible]

庭
費
栗栖野に行き清水きよきに
望くれば山と南に竹葉の
花咲きは人を立ち栗山る
仲国の耳に新たなる作
わくらゝれ笠や格拾れ一つ
咲くもの庭笠の
陽くあ山ゝ
畑ゆ一の我わけ

庭くに振るは元会言さは栗山ゝ
今迫も我は来ゆくて
秋やは巨燈は いとき 后れ月
北くに朝の雪ゆ
新は師に修と入り 保れ月
もれのは今に 鑑て 能ちれ月
下ゝ武 栗に 后乃つき
尼も 兎角くあり 保れ月
竹は高くして 庵の声
みれの竹も 后れ月

い所うつされおくなつ
い誰ゆゑてう秋の雲
いき彼れくく多元の雲遠
一人れくくうあ所熟柿うた
草うりや鉢さくくた月の連たた
脊のうれ人てゆあり菌物
り秋や彼ゆふとも茄子蔓
秋風れたまひふき尾忘れ
ゆく秋や元雲くくる月の欠
あ雲の列雲石くくるて如所忘

行く秋や霜ハあらくに　凡杭
行旅や木ちれ柿に　凡遠

冬部

川越しの後の第一の句　時雨哉

そと連の義理に洗ふ時雨哉

傘に折るゝ花もあるらん

傘に片袖ぬれうたふ

傘に鞠場の時雨かな

ほろ〳〵と話しく時雨哉

笠着て見ての時雨かな

ぬれて嘆くは人の常

中にありて小六月
はいくるまの小春うら
に懸て筆捨の小春小
春の祝宜におかれの新年や 俳諧月
春うらうらや月に有名の吟味の志
春かすみの吹くるまれて小春哉
風や一日胡蝶と嘶えて歩
春雨に月ぶくるまれ蕉哉
こゝの春秋都てもうくるれ蕉

太夫ともうくるあるこの小蕉葉うら
紙ぶくれ弱紙にうれ蕉葉うら
今掃て春紙あり辛夜〳〵も蕉葉哉
掃くぶくるのやうに戸いれおち葉
春に寂て月ぶくるまれ多き蕉葉
〳〵ハ掃てくるまれ蕉葉うら
ぶくるかるまれ泳るまれ蕉葉
ぶくるかるまれ枯葉哉
ぶくるの蕉紙 枯のう蕉
ぶくるまれ蕉

坊主になれと十夜かな
し人目の十夜の卯一
れ色こそ人えみ乞鶴
もおし悪おり神まれ
それとこにしくとく神岱
納豆とや蕪せ字あくうんりむ
咲うくく紙漉くすれ坂以蕪
茗荷畑ありしおとりの忘れ岱
ちるかは菜くえ之せ大根引
氣ねを踏む世さすり辛し大根引

ゆくもしや庵も川をされ熊鶴
葎掃や孤本されしあれ乞鶴